

## 平成23年仕事始め年頭の挨拶（教職員向け）

明けましておめでとうございます。

2011年の年頭にあたり、ご挨拶申し上げます。

新しい世紀を迎えて、10年が経過しました。国内外の政治・経済・国際情勢はもちろんのこと、大学にとっても歴史上類をみないほどの激動の10年でした。そして、今年も、これからも、大きな変動のまっただ中に、私たちはいることとなります。

年頭ですから楽しい話をしたいのですが、それを許さないほど、大学を取り巻く環境は厳しさを増しています。

国立大学の基盤を支える運営費交付金は、厳しい財政状況から法人化以降毎年1%削減され、静岡大学では基盤的経費が平成16年度から平成22年度の6年間で6億円削減されました。来年度もほぼ1%の削減が予定され、さらにその後については、より大きな率で大学の基盤的経費が削減されることも想定すべき状況です。教育・研究の質の維持が脅かされてきています。国立大学法人としての存在基盤、存在意義が鋭く問われているともいえます。

資源の乏しい日本にあって、人こそが財産です。将来の日本を担う人材を育成する大学の役割は、従来にも増して重要となっています。このことを、一人ひとりの教職員が声を大にして学外に広く伝えていく必要があります。

未来を担う人材を育てる責任の重さと楽しさを一緒に分かち合うことができるのが、大学のすばらしさです。

環境が厳しいからこそ、協力しあって、この難局を乗り越える英知を結集しましょう。厳しい環境に流されるのではなく、静岡大学の強みを一人ひとりが認識して、新しい流れを作れるように、強い大学をつくっていきましょう。

昨年末には、吹奏楽団の全国大会銀賞受賞、人文学部の大野旭（楊海英）教授の「墓標なき草原ー内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録」の司馬遼太郎賞受賞、教職員サッカーチームの静岡県教育長杯準優勝など、学生、教員、職員の活躍の報せも届いているところです。今年も、是非、元気を出して行きましょう。

昨年の所信表明でも申し上げたように、「勉強するなら静岡大学」「学生が成長する大学」と言われる大学を目指しています。新年にあたり今一度、この言葉を教職員のみなさんとかみ締め、新年の挨拶に代えたいと思います。

平成23年1月4日

国立大学法人静岡大学長

伊東 幸宏